ノーベル賞から 小嶋祥三

本庶佑氏が2018年のノーベル生理学・医学賞を受賞した。一昨年の大隅氏に続く受賞だ。 大隅氏は基礎研究の重要性を唱えているが、本庶氏も同じことを述べていた。最近の科学行政はお二人が心配する方向へ向かっているのだろう。基礎研究をおろそかにした結果、20,30年後には日本人がノーベル賞を受賞することがないかもしれない、という不安である。お隣の韓国では、なぜ自分たちはノーベル賞をとれないのか、分析している。生物学的には日本人と韓国・朝鮮人はほとんど差がないのだろうから、現状は、彼らが言うように、文化・社会的要因によるものだろう。彼らの分析では、基礎科学でなく役に立つ応用科学に力を入れていること、研究者の関心はすぐに成果が出る研究に向いていること、この道一筋的な職人気質に対する評価が歴史的に低いこと、などを挙げていた。この最後の点はともかく、初めの二つは現在の日本の科学行政の方向と一致していないか。わたしが京大を去る少し前から、大学の評価や、研究の納税者への還元が強く言われるようになった。そして国立大学の法人化で、研究費(運営費交付金)はどんどん減らされているという。国や文科省は大学の教員や国民をもっと信頼していいように思う。大隅氏も本庶氏も自前で基礎研究を行う若手研究者の育成を目指している。文科省は不祥事ばかり起こしていないで、少し目を覚ましてほしい。

本庶氏が医学部長、医学研究科長の時期と、わたしは霊長類研究所の所長をやっていた時期が重なるので、評議会で一緒になることがあった。本庶氏は威厳と自信に満ちた堂々とした態度で意見を述べていたのを記憶している。少し近寄りがたいナという印象を持った。この点は、研究所長会議の仲間ということもあるが、ノーベル物理学賞の益川俊英氏の話好きで、解放的な印象と大きく異なっていた。

本庶氏は京都大学高等研究院の副院長なので、高等研究院のホームページをのぞいてみた。院長は数学のフィールズ賞の森重文氏、副院長が本庶氏と霊長類研究所で同僚だった松沢哲郎氏である。無論、本庶氏がノーベル医学・生理学賞を受賞したという情報が載っている。それは当然だが、それとは別の、わたしには奇妙に思える情報を見つけた。それはこのホームページで紹介したチンパンジーのじゃんけんに関する論文が Primates 誌の Social Impact Award 2018 に選ばれたという情報だ。わたしは本庶氏のノーベル賞受賞と松沢氏のaward のあまりの落差に驚き、ため息をついた。すでに紹介したように、松沢氏らの論文は問題が多く、わたしが査読者なら reject か、大甘の判断で revise を要求するレベルである。わたしが読んだ限り、チンパンジーはじゃんけんを理解したとは言えず、循環的関係の理解もラットやハトと類似した結果で、特に新しさを見出しにくい。チンパンジー、ヒトの手を用いた最後の般化テストのセッション数はそれぞれ約 40,32 セッションである。すなわち、新しい手を導入すると、チンパンジーがじゃんけんを理解するのにこれだけのセッション

がかかるということだ。試行数にすればさらに膨大になり、仮に一日1セッションならば、新しい手によるじゃんけんの理解に 1 か月以上かかったことになる。般化の積み重ねによる節約効果も明確でない。この結果ではチンパンジーがヒト並みにじゃんけんを理解したとはとても言えない。繰り返さないが、ヒトの結果にも疑問がある。これらの結果から、チンパンジーがヒトの 4 歳児並みの認知能力を持つと結論するのは困難だ。わたしには百戦錬磨の松沢氏や共著者の友永雅己氏が論文の問題点を理解していないとは到底思えない。なぜ、このような論文をマスコミに流したのか、あるいは流れるのを黙認したのか、理解できないでいる。このようなことは、中国からの留学生の教育にとっても、霊長類研究にとっても、Primates 誌にとっても好ましくないと思う。無論、松沢氏本人、高等教育院、京都大学にとっても好ましくない。